

通俗伊蘇普物語

六

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 書號	第	號
文學部		內
英文文學部		部
小説	目次	項
全	冊ノ内第	冊
分類 番号	第	號
	2562	933

T 1A1

22

W 46



a 1 3 8 0 3 2 2 3 6 0 a

福岡教育大学蔵書

伊蘇普物語卷之六目録

- | | |
|-------|----------------|
| 第二百四 | 二足の畜犬の話 (204) |
| 第二百五 | 童子と盗人の話 (205) |
| 第二百六 | 新婦と石匠の話 (206) |
| 第二百七 | 馬と買客の話 (207) |
| 第二百八 | 鬼と獅子の話 (208) |
| 第二百九 | 信の神と旅人の話 (209) |
| 第二百十 | 麻と羊の話 (210) |
| 第二百十一 | 旅人と狼の話 (211) |

第一板

五 四 三 二 一

第二百一十二

鶴と鷺の話 (212)

第二百一十三

駿馬と牧師の話 (213)

第二百一十四

旅人と運の神の話 (214)

第二百一十五

冷戦と鶴の話 (215)

第二百一十六

鹿と獅子の話 (216)

第二百一十七

驢馬の自慢の話 (217)

第二百一十八

農夫と鰐蛇の話 (218)

第二百一十九

禰計と彫像工の話 (219)

第二百二十

二足の陸移住の話 (220)

七 八 九 十 十一 十二

第二百二十一

法師と盗人の話 (221)

第二百二十二

小鳥のお解の話 (222)

第二百二十三

北村と樵夫の話 (223)

第二百二十四

孔雀と鶴の話 (224)

第二百二十五

北村と犬の話 (225)

第二百二十六

兎殺人の話 (226)

第二百二十七

狐と鶴の話 (227)

第二百二十八

男火と女火の話 (228)

第二百二十九

犬と羊の話 (229)

十三 十四 十五 十六 十七 十八

或人一の馬を買んとせし時、乃ち試験を遂じよう、極はな
べきか。一ある借て下されきて、之を我衆へひきかへり。己が馬
共一厥に入きて、さう翌朝より。主人は馬を試験んと
厩内より入きて、乃ち。借来る馬の日、我衆著ある大衆の馬と
友とて、いそびあけまば、もはや是で試験も及まぬや。お
之は害をとも、賣主の方へ返し、まゝも。賣主がいやんで、いつか
試験をあらんと同ふ。乃ち。既試験し及まぬ、昨在厩内
入きて、内は。彼驚が然と、はなれ、友馬の性質う、知まき。
人の善悪、いれ交る、交の友より、つてあきま。

第二百八 鬼と柳子の話 (208)

或時秋の會議よかつて、鬼が大議論を幾く、いづも世の中
尊卑大小あり。柳子が一振でなけまば、あゝ、夫が天下の公法
いふ。柳子、柳子、大言をいひて、鬼、成程は尤の發言、や
能然列位、拙者の拙ふかと、牙を、い、持ふも、な。
兵力が、なれ、用は、威勢、いつ、ね。

第二百九 信の神と林人の話 (209)

或武士、渺く、する、亞利は、亞の、沙漠を、過り、あふ、ま、む、や、の
美女の、た、す、む、は、ひ、ひ、り。其時、武士、あ、け、も、い、や、ま、い、



或人鵲うぐす、我われを要もとめひ。我われも不意ふいの料理りやうの事ことなり。鵲うぐすが
親おやおのゝあゝとて、一庭内いつてい又細こひをきくふ。或ある少せう親友しんゆうがづら来き
れば、料理人りやうじんは云いけ。一酌いつしやくのたまはなからせと。料理人りやうじんは鵲うぐすを
殺ころし、酒さけのさくれをうへんとす。我われもつゝあゝとて、鵲うぐすが
園えん衣えなりければ、鵲うぐすを我われとて、さぐで縛しばんとせしむ。鵲うぐすが
コレハおとろい。一勢いっせいきつて、すぢく料理人りやうじんが家いへがけ。ホ
コレハ百達ひやくたつ。鵲うぐすではなかつた。

投機とうきの一勢いっせいをかかへ、光みつをい。

第二十三 驢馬ろばと牧猪ぼくしゆの法（213）

或ある日ある牧猪ぼくしゆの法（213）の法（213）を授おとけし。さきをみせり。時とき又俄然いつぜん
四方しやうほうは閑静かんじやうがあらう。款くわんの攻せう考こうる。我われもあれば、牧猪ぼくしゆがあらう。スハ
汝なんぢをひかりよげ。いゝとて、驢馬ろばがうへに、緩緩かんかんと進すすむ。我われも
「まぬ。うげ。のほきり。まぬ。海うみはあゝとて、我われもあゝとて、驢馬ろばがうへに、
でも脊せうと二箇ふたつの所ところを附つき、我われもあゝとて、驢馬ろばがうへに、
我われもあゝとて、驢馬ろばがうへに、我われもあゝとて、驢馬ろばがうへに、

政府せいふが勢せいのいふ、名なのかも、けり。別べつに、さきをみせり。時とき又俄然いつぜん
下したの考こうる。あゝとて、政府せいふのいふ、名なのかも、けり。別べつに、さきをみせり。時とき又俄然いつぜん

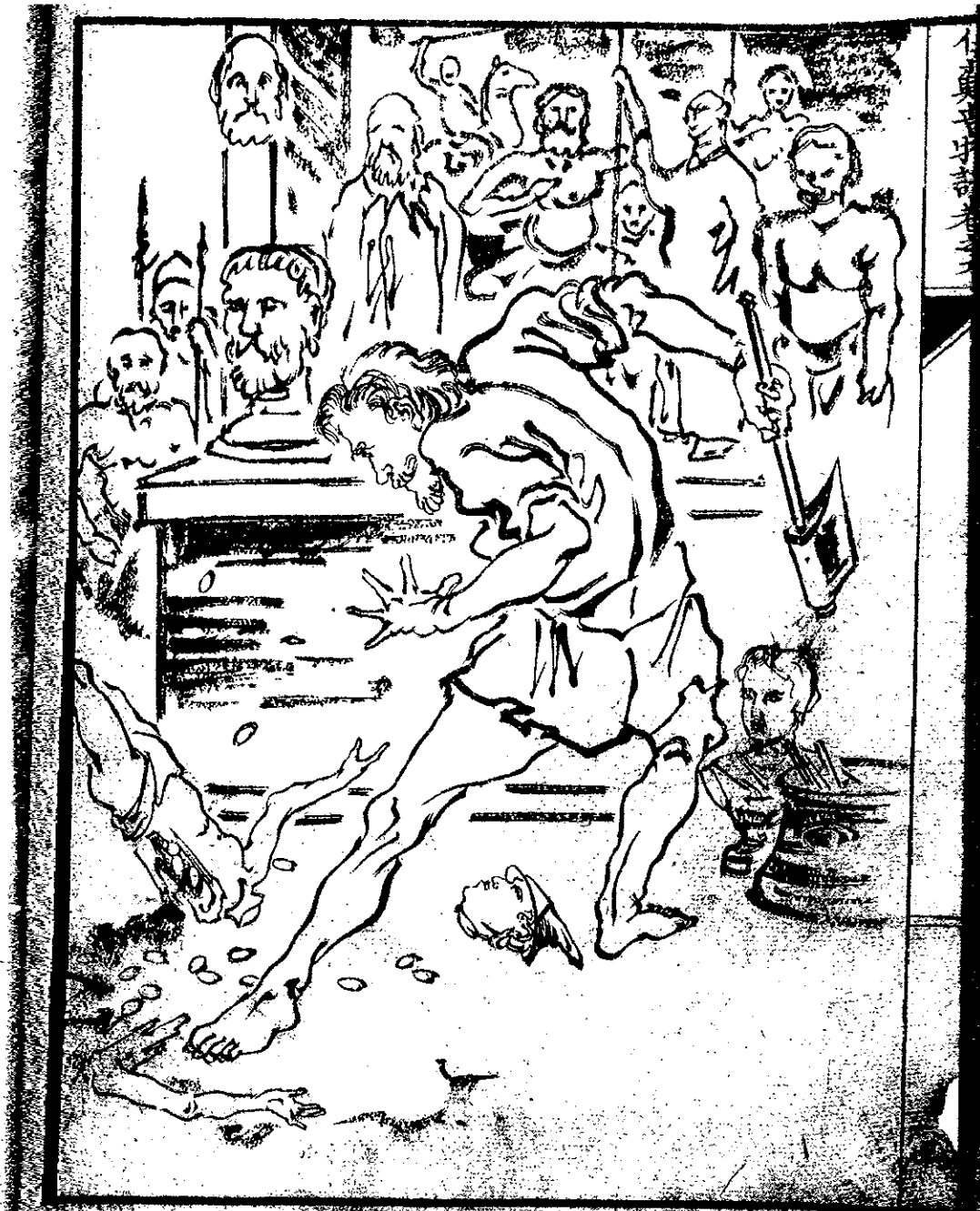
第二十四 旅人りょじんと導どうの法（214）

酷暑こくしよの日の午後二時頃。稲刈りの壮男がやまづれて、昭政の樹蔭
 やまづひて、廢井のお菊は繰折うけ。凍をいれてあつた。おひ
 妹むけをもめかして、おひ井の田んぼに、休もありたり。さう
 する、一老翁が忽然としてあらへ、おひ壯男をゆりさす。「コレ起し
 をせ。」我の世より逢の神、やぞ。汝がもーおの國からで来るとや。
 我がまゝかくり合ふありまん。兎角世の人ハ不圖にお災わざから災
 害と知りて、運がよろしく。我の所為はとも知らずまん。

第二五五
予城ノ語
(215)

或絨^{ぞう}の農家^{のうけ}は忍^{しの}へし。彩^{いろ}の外^{ほか}何^{なん}もやをむきしものならざるべ。
 彩^{いろ}の羽^はきやとくありて忍^{しの}へし。これを教^{おし}んとす。時^{とき}又。
 鶏^{けい}がはこれな勢^{せい}を以^{もつ}て。伏^ふ翼^{よく}ゆけ下^{くだ}されし。私^{わが}人^{ひと}の爲^{ため}
 は格^{かく}別^{べつ}差^さあり。ゆゑでなすまん。私^{わが}毎^{まい}朝^{あさ}者^{もの}いふ。ゆゑに
 さや。職^{しやく}業^{ぎやう}は就^{しゆ}きん。城^{じやう}が眼^{がん}を及^{およ}す。夫^そだかり
 我^{われ}いふ。これならされればあつぬ。汝^{なん}があつ。人^{ひと}を以^{もつ}て
 もの。予^{われ}の業^{ぎやう}がさやかり止^{とど}ます。ゆゑ。
 善^{ぜん}き。悪^{あく}き。の弊^{へい}を欲^{よく}する。我^{われ}。

第二百六
鹿と柳子の話
(218)



我^{われ}も甘^{あま}やうな人^{ひと}と云^いひ。我^{われ}の丹^に津^づを抽^ひんで福^{ふく}神^{かみ}の像^{よう}をつり
出^だす。此^この業^{わざ}も放^{はな}擲^てで。毎^{まい}日^{にち}福^{ふく}のいり方^{かた}をえかりあつていれども。
更^{また}は雲^{くも}路^ろはく^くびく。まじく。國^{くに}窮^{きゆう}は入^いれば。是^{こゝ}で中^{なかつ}す
後^{あと}くまどと云^いひ。再び心を取^とりて。原^{もと}來^{きた}の職^{しやく}業^{ぎやう}を出^だす。
お夜^{ちや}をくくせられ。是^{こゝ}でねがう。活^{かつ}計^{けい}と云^いふ。
そこで彫^が像^{よう}工^くが怒^{おこ}る。或^{ある}日^{にち}福^{ふく}神^{かみ}の像^{よう}を和^わより引^ひき出^だす。
此^この神^{かみ}のおかげで大^{だい}に換^かへた。皆^{みな}をひて尊^{そん}像^{ざう}のそを
打^うた。由^{よし}に金^{かね}取^とりぬれぬ。彫^が像^{よう}工^くこれをもと
仰^{おほ}天^{てん}。コレハマア今^{いま}迄^{まで}のやね。時^{とき}と少^ち許^くも云^いふ。
夢^{ゆめ}を費^つへていりうも云^いふ。

あつてお壊^{こわ}した時^{とき}は。益^{えき}がらう。はくも。福^{ふく}神^{かみ}の首^{くび}が
夢^{ゆめ}を費^つへていりうも云^いふ。

第百廿 二足の蛙後伝の話 (220)

夏^{なつ}の早^{はや}魅^めは或^{ある}日^{にち}此^この金^{かね}取^とりぬれぬ。内^{うち}は住^すむ蛙^かは定^{じやう}あは
と。此^このすゝめは地^ちの福^{ふく}と云^いふ。其^{その}のよは。或^{ある}日^{にち}所^{ところ}を過^かる時^{とき}。深^{ふか}き廢^{くさ}丘^{かみ}のあつて。一^{ひと}足^{あし}の蛙^か
内^{うち}のそき。コレハねさうな井^いト云^いふ。水^{みづ}も金^{かね}おも海^{うみ}のり
さう。是^{こゝ}で。是^{こゝ}で。友^{とも}はが用^{もち}心^{しん}を。汝^なも。水^{みづ}が思^{おも}は
はく。友^{とも}はが用^{もち}心^{しん}を。汝^なも。水^{みづ}が思^{おも}は



惟曉舟



これ我後又むらうらうらうてあぶきなりやや何。第二はもめ
が死るすをもめんと思ひ死なうらう。然るものやがいの
我をもめんと思ふもや何。第三は去てうらぬやとや
死なうらう。我をもめんと思ふもや何。後よくひきげき死な
や何。すべて人と思ふのみきうら。みまけみらのつり
まゐりて。死なうらう定らぬものぞ。やあつち死なうらう。林の
内は死なうらうとぞ。

子曰止。かひく見ゆふを知。人を以てきやうとぞ。やあつち死なうらう。

第二卷三 北極子と穢夫の話 (223)

或日北極子が北極子の不在をつけこんで。北極子の怒をうらんとぞ。
穢夫は北極子を突殺しうらうけり。然るも北極子がやう
涙をかくりき。此情をうらうおき。考をうらうて。慟哭しあは。
穢夫はききう。勢をかけ。汝は死をうらうとぞ。汝は死をうらうとぞ。穢夫は
殺多しうらう。

我身捨て他のいさか知。穢夫の穢夫や。(補)

第二卷四 北極子と穢夫の話 (224)

或日北極子が北極子の不在をつけこんで。北極子の怒をうらんとぞ。
穢夫は北極子を突殺しうらうけり。然るも北極子がやう
涙をかくりき。此情をうらうおき。考をうらうて。慟哭しあは。
穢夫はききう。勢をかけ。汝は死をうらうとぞ。汝は死をうらうとぞ。穢夫は
殺多しうらう。

油の臭いにお代は魚の味様松とやノ不堪親形状なる」といふ。
落が裏面目はあつて「実なるや。あか」我の羽突では一翹り
飛揚で星のまきでもゆけまん。それゆゑ詩も落九華一
鳴く聲やまづもけりていふは。是下ある松お羽のき
うぬ下鳥の歌いふちがひまん。

羽お突が綺羅ふやとておつて貴いかなうぬ。

第二十五 北極と犬の話 (225)

或北極が一度ふつて火を産けり。かくおれの指目より周るみ
まふととも。何あつてつておのちを産けり。つておのちを産けり。

とろく或日外に物るつてつて。其を「な子と前」に。
おろそつて「子を産けり」おひてゆきたり。に。落く「猛犬
おとよりおひきたる」それ母様大におどろき。いふきつて子
を小狼よりひらみ命よりいふげも「おれは」前は「重」あ
まは「みやか」やうくおれまん。あまた犬いまん。おひ近付たれ。
母様も心をばも小狼を「子を産けり」に。漸く其を「け
のび」うけり。あまおれに彼をされつて子。犬の牙は、かくこれ
とも。うとまれつて子。母の背は、おれに「おれ」に。ひつて母の
愛を、おれに「おれ」に。おれに。

第二回　男児と女児の活(228)

或人一男児と一女児とを持。男の子は、美なり。女の子は、やう醜くぞうけ。或日は父兄が母兄の化粧部屋へついで、かづに建ち上り、鏡をむしひ。男の子は己が容儀のうつくしさを、女の子は己が容姿の醜きを知りて、いかにあげね。さういふが、いは口論をは出して、其は父の膝下をかけ来り。女の子が「父兄、阿兄の女でもあいくせだ。阿様の後をとんで、私の手をかきこれ、排斥します」といふと、父が「コソサ、あなたも男松屋さんで、口論をせぬものじや。変な子で、ばかやうな美やよ。汝は必死に後



はむうふねら。かんで悪いけ状がらつて。まは海を渡るね
れと。さきもんを付まふとぞ。おとぞ。又お美い漬むうとあら。なん
でも女の徳りと魔まはるぞ。其客儀の碗いのと。僕が振うたりのと
と。くずんを付まふとぞ。お呼喚。やうと。まは海を渡るね
ん又記。まはるまは。ぞく戒めふとぞ。

第二の巻 犬と羊の話 (229)

或時犬が羊とけ遇て。汝はか。一石の表をかくせ。かくばん。
汝をくさんといふ。羊犬はおどろき。おどろき。表をかく。是ぞ。
や。強へといふ。犬がく。きつて。證人が訴ふと云て。

狼を弱か。かくして。新玉の御座。ううと。出。此をす。はら
そ。其時狼先犬をく。は。羊表をく。かり。おどろき。は
と。ま。亦をく。我も強人といふ。鴨も又昔さ。出。
我も強人といふ。かく犬のく。みま。多。つひは
理を非。い。は。羊のせん。おどろき。に。ま。我毛と
ま。一石の表をつ。のひ。と。は。

悪人は組も。のいか。悪人は組も。のいか。浅ま
く。あ。ず。や。

第三の巻 狼の自慢の話 (230)

まうて。何れを毛か海をあらう。秋深く寒くあらう。我族の
妻あなもて是獨るび。うゑでえてるを後へり。我族の
つゝあまのものをみそあらう。はまの村まをあらう。ぬい
止。はまのびやうと云て。穴の内は入るのと云。
國時の榮耀はあらう。方の村まをあらう。(補)

第三十三 根の医術の話 (232)

或時馬がやま出てを食する。是を食する。是を食する。思ひ。
先づ謀をめぐらう。其あはびきき。山にいはれ何れを食する。
給ふぞ。我の山に医術をとらん。まをいふ。馬の根の

悪念をさうて。おれ道に浦山あは医術をあらう。はまの村まのう那。
おれ我族は利をたて。おれまをいふ。山にいはれ何れを食する。
根は。うゑでえてるを後へり。我族の妻あなもて是獨るび。
先づ謀をめぐらう。其あはびきき。山にいはれ何れを食する。
給ふぞ。我の山に医術をとらん。まをいふ。馬の根の
悪念をさうて。おれ道に浦山あは医術をあらう。はまの村まのう那。
おれ我族は利をたて。おれまをいふ。山にいはれ何れを食する。
根は。うゑでえてるを後へり。我族の妻あなもて是獨るび。
先づ謀をめぐらう。其あはびきき。山にいはれ何れを食する。
給ふぞ。我の山に医術をとらん。まをいふ。馬の根の

此根のやうなぬきを知り。良きものなり。福きものなり。
面をあらう。た。(補)

第二十三 狐と狼の話 (233)

或時毛虫の金銀の席を一つ一個の山狼巧は踊を踊りたれば。群獣よりびて之を獣王にしがめり。然るに或中狐のみ由ん甚だ不なうけられれば。或日某変に罟の設施のあをみ出して。狼様をうに案内。『国今の解合せんさくのうあをみ。諸方巡りつて。変め此き事ある人あをみ出さう。』其か非常のそのあが極に。教てけいしに之をあらん。皆で大王は献トする。とやくまやとされ。狼は殊の外よりんで。『汝は此家あき忠にあり。』とて何の者もあくしをさう出。

既解をうきん。あうきを。うきあはれうけ。そが。狼がうきうひて。此妻と奴とのあうきけ。狐が「後及足下の狐を道個に思慮で。獣王あうき大に事お説がせ。

第二十四 繭紫奴の話 (234)

或夕繭紫奴がむ疎がかりで。晩餐を食て。あを変へ。朋友がふたねきうきれば。一盞をさうめんさうふ。折る。何々下物のうきうきれば。『せんすい。』のうきすに。國はさう山鳥を。解ん。と。國は。主。公。私がわあうきす。なから。明日から繭紫をかくけなされ。付やけられん。誰が他のあを

と云へばいせせん。誰が王公は多きとせせんといふも。精進
奴が道理やと思て。直まきとやうなり。されども物づくして
かゝぬ。鶏は鶏かくも。猪が猪いぢで。王公。私があゝ
ありまゝたあり。誰が王公はねつけと知せせん。誰が汝を起
して。曉夜を足らせせんといふも。もぶかけがかんがへて。
「威社汝のいふ事も道理や。實は汝は曉と告る一番きや。
まゝく不用と付ふもね。あゝ——こゝは我が我の友を酒をのま
ねばあゝぬ。いふやうが出来ぬぞ。」

鼠の王は道理がうぬ。

第二章 獅子王と鼠と狐の話 (235)

或る獅子が果ては堪へて。洞の内に居て年暮をすごす時。一匹
の小鼠が大王の熟眠するを心暖み。そこへとよぎ寄り。思は
其鼠や鼻や耳——いけあうと。獅子が睨み眼を視開て。
「汝小鼠逃——いせ」と。洞の内にあひまといひ。近の狐がう
ねてきて。獅子の怒まらぬをみて。「大王陛下は鼠を教
ふふきのを」といふ。獅子王が答へ。「ナニ彼奴を教ふふはね。
あゝ——いふれをいふさうなれはあらぬぞ。」
此の細の事だが大不意の種やぞ。

第三百六 獅王の領内の話 (236)

或地方よもむ獸共が。一の大獅王の支配を交りあうに。其獅王の性災みておやたらかゝりて。けいけくきびのつれば。領内のものどもおそれふとみ。山も野も森も林も。極靜謐とぞなりけ。獅王は或日獅王の廳衛より。命令を出されて。諸家つとも我前よまたり。永久互は和睦はまべりと。盟約をうて。とけりければ。獅王も羊も鹿も。鹿も犬も鬼も。一國よりお畏つて。即刻獅王の所へ参上。しるふとあたりけり。其時鬼が歡喜踊躍で。後代まで。是れお祝して。一難ありく。

吾輩の獅王の強いのが。強いの。傍に吾輩でゐられまへといふ。とけいひけ。

王威がまむ強も弱も侵もる。能く。

第三百七 獅王と牡羊王の話 (237)

むか。獅王と羊王。舞あうり。とられへて。天帝は歎ひなり。牡羊王同様に。牡羊王と羊王。とけいひけ。牡羊王が犬と不平をあらして。或るとき。刀をもち。牡王同様に。獅王を討つて。牡王の位。亂るにやうん。其れい。牡王は舞をうへ。舞ひ。らん。と。とられ。て。獅王。徐よきと。強ひて。愚なり。

英
文
童
蒙
訓
話

近
刻

富
國
經
濟
學
大
成

近
刻

山城屋佐兵衛

東京書肆

中外堂梅次郎

藏田清右衛門

駿
州
沼
津
書
肆

尚古軒浦 告